校友時報

昭和59年6月1日
編集人兼発行人
秋田県能代市高塚2番1号
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所　㈱大勝堂印刷

激論騒然の二時間

先月、今年度の生徒総会が行われた。ここ数年来のスピード総会とはちがい二時間にも及ぶ長い会となった。しかし、質問の発想は低レベルで、能高生の不真面目さがここにも出たようだ。

予算案すべて承認
生徒会費値上げ

五月十日（木）に五十九年度定例生徒総会が行われた。正・副議長に大塚佳樹（三B）藤盛圭太（三E）が指名、承認されたあと審議にはいった。

「五十八年度の決算案」、「生徒会費の値上げ案」、「今年度の予算案」が順次提案され、それぞれ拍手で承認された。しかし、この直後、「生徒会費の値上げについて承認を求めたとき、生徒会則に定める過半数に達していないのではないか」、一承認を求めるとき拍手では確でないので、起立させるなど別の方法をとってほしい。」と、採決に対して異議申し立てがなされ再度挙手で承認を求め直すという異例の事態となったが、結局承認の再確認という形となった。その他、「予餞会は施されていないのにはず予餞会費が計上されているのか。」の質問には、「例年予餞会は実施されることを前提として予算案に入れてきているので前例に従った。」と執行部から答弁があった。

次に、「映画研究会」の設立について会員から活動内容等、主旨説明があり、部屋の使用権などについて、二の質疑応答はあったが同好会としての設立が承認された。引き続き一般質問に入った。

一般質問では、「インターハイのためだけ遠足がないのか。」、「男子トイレの異臭が強いのでなんとかしてほしい。」、「猫が教室に入り込んで授業に差しつかえている。処置してほしい。」など学校側に対する要望を中心に発言された。

真剣な表情

質問者数増える

今年の総会は近年になく活発であったと言えるが、質問者数も数年来のゼロに比べると大幅に増えるという大きな変化がみられた。ただ、生徒会運営とは直結しない質問（トイレ問題や猫問題など）が主流を占めたため議長はその対応に苦慮し、再三執行部との打ち合わせのため降壇するなど議長席があたかも間もないほどで四苦八苦する姿が所々に見られた。

結局、二時間にも及ぶ長い総会とはなったものの、相変わらずむだ口が多く、討議の内容を真面目に聞く者はごく一部で、ほとんどの生徒が総会には興味のない様子であり、依然として生徒会に対する無関心さが好転したとは言い得ない状態である。さらには総会終了後、あらかじめ生徒に手渡されていた資料が多数本育館に散乱するということもあり、改めて生徒の自治意識の低さが感じられた。やはり今回も「全員参加の生徒会」という自標には到達出来なかったようだ。

なお、この総会で、今年度の能高祭実行委員会の各部門リーダーが紹介された。

対面式のあり方

説　部

四月七日に行われた恒例の"対面式"。今年は、生卵、こんにゃくなどが新入生に投げつけられた。

この物を投げつける対面式。一部では、"伝統だ"とうそぶいているが、はたして、真新しい制服の新入生に頭から生卵を浴びさせる、この精神的屈辱感にも似た衝撃を与える無軌道な行為を伝統など美的表現で伝えようとしたのであろうか。

能代高校に、あこがれの期待を抱いて入学してきた新入生に対して物を投げつける。我々の中には、この行為の低俗さに眉をひそめて、憤怒の心をかりたてられた人がいるはずだ。

しかし、これを「悪いことだ」とも思っていない。無判断、無分別なやからのいることが問題なのである。物を投げつけることの是非の判断の前に、これが、自分なりの歓迎のしかたであると思っているのである。だからこそ、再三再四の注意をも顧みずただに途絶える気配をみせないのであろう。

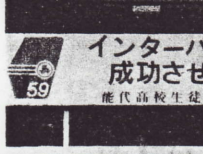
そこに、今の能高生には、他人はどうでも、自分がよければよい。という自分勝手さ、無責任さの浸透を認めざるを得ない。また、良識派と思われる人たちは、彼らは彼らで、周りの者から、自分を遊離させれば、反発をかうのみと思いこみ、知らぬ半兵衛を決め込んでしまう。だから、いつまでも、この低迷状態からぬけだせないのである。

今の我々には、非常識なことを、あってもそれを見て見ぬふりをするという変な仲間意識が働き合っている。

たしたことがないようなことでも、見逃さずに、よく考えてみて、悪い事は悪い、間違っていると、言えるようになること。これが実できなければ、対面式のことはできないし、自分達を高尚させていくことなどは毛頭できないのである。

事は、当面の打開は、このあたりからはじめる必要があろう。

59インターあと二ヶ月
準備進行中



間近に迫るインターハイ

開催まで残すところ、二ヶ月余りとなった秋田インターハイ。能代・山本地区でも、男子ソフトボール、相撲、フェンシングの三競技が開催されるとあって、この地区の六校で構成する能代山本ブロック生徒推進委員会の活動も、エンジンふる回転である。

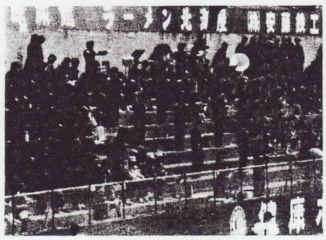
ブロック推進委員会では、目抜き通りの商店、官公庁、都市内の各小中学校に「59秋田インターハイを成功させよう」と書かれたステッカーを掲示したり、「推進ニュース」の発行、広報車による街頭宣伝等のPRに活発な動きをみせている。本校の推進委員会ではこうした活動の一貫として、美術部と共同製作したオリジナルの横看板が、昇降口に設置された。推進委員の仕事を"御膳立て"とすれば、当日の裏方となるのが補助員である。その仕事は様々で、本校は一、二年生を中心に、受付係、昼食弁当係など、男子ソフトに係、相撲に係、計一種の係（六十名）が割り当てられた。

まだ、この地区で行われる競技の選手団二手名に贈る記念品づくりも着々と進められている。先日ブロック推進委員会で、記念品は秋田杉を使った手造りの状差しに決まった。この状差しは形の板には「能代七夕」、二ツ井町は「米代川ライン舟下り」、山本町は「ささら」といった図案のゴム印が押され、板の下にはインターハイマークの刺しゅうがされた袋がつけられる。板を切り、ゴム印を押す仕事は能代工が担当し、進行中である。布袋の作成は、他の五校で分担された。本校では、一、二年生の女子が家庭科の時間を使って、二百個の製作にあたった。

「一人一役」は様々な面で、遂行されている。そして、間接的ではあるが、公共施設、学校等の環境美化や、あいさつ、会話の交し合いなどによって、遠くから来た選手の気持ちがなごむもう配慮するのもまた、「一人一役」すなわち、インターハイへの参加である。

インターハイとは、高校生の総体なのである。一人一人が"自分達の総体だ"と認識したとき、このインターハイは成功するのである。

迫力ある応援を



千人の大応援団

去る四月二十八日、硬式野球春季市内リーグ開幕試合、本校対能代工戦に全校応援が行われた。

折からの好天のもと、三塁側スタンドは約千名の大応援団でうずめつくされた。

試合は午前十時に開始された。

応援は応援団幹部とブラバンが先頭になって行われた。しかし、応援団幹部の練習不足や応援歌練習が十分に行われてなかったため意気の合った応援とまでは至らなかった。

さらに、一般生徒の中には応援に来たというより、観戦に来たといったような人が多く、個人的に声援を送ったり、途中で買い食いをする姿が目につくなど、いくら応援団幹部が歌を歌うよう指示しても、一部の生徒しか歌わず迫力に欠けた応援となった。

とはいうものの、今後はもっとこのような全校応援の機会を設けてほしいという声もきかれた。

試合は、本校が持ち前の打線を奮ってコールド勝ちを収めた。

能高祭活動スタート

"Culmination"―つかめ頂点―をテーマに、六月三十一日、七月一日の当日にむけ、能高祭の準備が着々と進行中だ。

なお、各部門の責任者は次の通りである。

能高祭実行委員長　大和剛彦（三C）
副委員長　桜木伸英（三A）
企画総括　大和剛彦（三C）
総務　神田智子（三D）
斎藤朝子（三G）
渡辺ゆかり（三G）
桜木伸英（三A）
三瓶　実（三C）
佐藤　学（三E）
会計　小林崇子（三C）
渉外　田村真紀子（三F）
広報　藤田　洋（三F）
用具　大高真寿美（三B）
装飾　売店　袴田英康（三G）
喫茶　菊池克子（三E）
食堂　菊谷祐二（三E）
クラブデコ　関根秀（三C）
クラスデコ　藤田幸喜（三D）
案内　原田金栄（三F）
前夜祭　加勇田清武（三B）
後夜祭　斎藤有紀（三G）
警備　松島長行（三A）
駐車　三浦広義（三A）
ステージ　小山　博（三D）
放送　藤盛圭太（三E）

貴重な体験
JRC

去る四月二十九日、鷹巣にある吉野学園（身体障害者養護施設）で「吉野子供の村祭り」が開かれ、本校からはJRC部員八名が参加し、おばけ屋敷や模擬店などの祭りの手助けを行った。

「今まであまり障害を持った人との接触がなかったので、初めは不安で、遠慮も持っていたのですが、健常者と少しも変わりのない人ばかりだったので、身体障害者に対する考えが一変しました。日ごろ味わうことのない貴重な体験ができました。」と、感想を述べていた。

こうした一部のボランティアに限らず、日頃恵まれない身体障害者へお母寄りに誠意を持って接していく心が広く高められていくことが今後に望まれることである。

校門指導
実施される

去る五月七日（月）から十二日（土）までの六日間にわたり校門指導が実施された。

今回の指導の重点目標は、服装・遅刻の防止・自転車置場の整理の三つであった。指導にあたられた先生は「今回の校門指導において特に目立った点は、カバンのかわりに紙袋に本を入れたり全然教科書の入ってないカバンを手に登校してくる生徒がいたことや、自転車の置き方は生徒たちが自己規制している様子が見受けられ、服装に関してもまだ年度初めということもあってか特に乱れた様子はなくほとんどの生徒が良かった。」と語ってくれた。一方遅刻防止の方は授業開始ギリギリに来る生徒もあり、また学年が進むにつれ数が増えているという状況も指摘された。

―――――――――

参加し、おばけ屋敷や模擬店などの祭りの手助けを行った。

「今まであまり障害を持った人との接触がなかったので、初めは不安で、遠慮も持っていたのですが、健常者と少しも変わりのない人ばかりだったので、身体障害者に対する考えが一変しました。日ごろ味わうことのない貴重な体験ができました。」と、感想を述べていた。

こうした一部のボランティアに限らず、日頃恵まれない身体障害者へお母寄りに誠意を持って接していく心が広く高められていくことが今後に望まれることである。

季節の窓

新築の校舎を映して
水ぬるむ

咳ひとつ
試験の吾子に妻おびゆ

梅　擬

点

▼先頃行われた生徒総会は最近になく活発なものとなった。質問が相次ぎ、引き続き行われる予定だった応援歌練習が出来なくなったほどである。

▼しかし、能高生の総会に臨む態度そのものは必ずしも最善の状態には遠いものがあった。ろくに話を聞かないで遊びでいる、人の意見に対して「チュー」を飛ばすなど高校生の態度としては寂しいものだった。▼能高生は、「聞く態度」がまったくなっていないのである。生徒総会ばかりではない、毎週行われるホーム・ルームも同様。担任の連絡に耳を傾ける生徒は少く、まじめに聞いている生徒でもほとんどの人がうつむいたままである。中には話しかけは関係ないとばかりに、教科書を広げ勉強している者さえいる。これら能高生の態度は少なからず話し手に対して失礼であると気がつかないのであろうか。合同ホーム・ルームもしかり、先生が講話などについて話しているのを上の空で眺めているだけで、メモを取る者はほとんどいない。▼このような「聞く態度」の悪さが話し手に対して失礼であるばかりでなく、様々な予定や行事などの連絡行き届きにつながり、適切な進行や行動に支障をきたしている。集会や委員会の集まりが悪い、保健の検診が時間通り行われないなどを見ると明白である。▼耳に障害がある人は、真剣に話し手を見つ口元や指の動きから言葉を読みとり、目に障害のある人は、辺りの音を真剣に聞き自分の周辺の状況を把握するという。この人達は言葉を聞きもらしたり、大事なことを見のがしたりすることは許されない、いやありえないのである。▼能高生は自分達が五体満足なことに甘え、真剣に「聞く」ことを怠っているのではないか。真剣に聞こうとすれば、おのずと「聞く態度」が改善されるはずである。

▼少し真剣に考えてみてはどうだろうか。